東氏の活躍

――雄姿そして優雅――

平成２８年８月

東庄郷土史研究会

土屋　清實

一、東氏誕生

父千葉常胤より子息らは北総地域を受けついだ。長男胤政千葉氏本家つぐ。次男師常手賀沼西部台地一帯。三男胤盛現幕張。四男胤信現大栄町。五男胤通現市川市国分。六男胤頼、現東庄町と近隣～銚子市。

胤頼が東を姓とするようになったのは文治元年（一一八五）、平家滅亡直後のようである（二）。この資料には東庄町の総鎮守東大社の第五〇代兼廣宮司の時　千葉胤頼が森山城に拠し、東六郎と称し宮司の姓、東を変えてくれるよう知らせた。そこで母方姓　畦蒜（あびる）をしばらく名乗った。第六四代種正宮司から飯田姓になった。元和四年（一六一八）であった（森山城の地帯は飯田郷と称した）

胤頼は前掛城に拠していたが（現旭市最北端地域）文治元年（一一八五）須賀山城を築き、さらに隣接してすぐ西に建保六年（一二一八）森山城を築いたと伝わる。現在須賀山城跡がＪＲ笹川駅南約一kmの高台（笹川根方地区）にあり、から堀と土塁がある。森山城は広々としていたとうかがえる。農地として今、利用されている。（現香取市小見川）。

二、以後東氏の行動　風雅のはじまり＝＝重胤

胤頼の長男重胤は源実朝（三代将軍）の時代に鶴岡八幡宮での流鏑馬奉納で大役を果たした。また京に上り、和歌を名門藤原定家に学んだ。このころ実朝の後見は頼朝の妻政子の実家北条氏の執権、義時で将軍は政子の系統。以降適宜の将

軍。（二代将軍の頼家は北条氏と意見が合わず伊豆修善寺に閉じ込められ、自害して果てた）。そうすると実朝は飾り物で、和歌ばかり詠んでいた。重胤は和歌風雅の京を知り将軍実朝から親しくされ、常に行動を共にした。重胤が休暇で東庄に帰り、しばらくすると実朝は重胤に会いたくなってきた

「今来むと　たのめし人は見えなくに　秋風寒み　かりは来にけり」と重胤に催促した。やがて鎌倉に戻り和歌献上（三）謹慎させられたが忠誠につとめ「無双の近侍」といわれた。その重胤が鶴岡八幡宮での実朝拝賀の式（右大臣に昇格）に参列した。悲運にも実朝は公暁にあやめられてしまった。公暁は二代将軍頼家の子。重胤はこの事を悔やみ仏門に入った「覚然」と号したのである（頼朝の長男は頼家、次男は実朝、公暁は北条氏にあやめられ、源氏三代で終わり、政権は北条氏に移った。東氏は北条氏に従って行動した。

三、承久の乱（一二二一年）

後鳥羽上皇は討幕の意を強め朝権復帰に諸国に号令した。幕府これを知り京に上り上皇をおさえてしまった。上皇は隠岐島へ流された。この時の功労で東氏三代の胤行は美濃国山田庄（現岐阜県郡上市）を加領された。こうして東氏の主力は美濃に移り東庄はさびしくなった。胤行の長男泰行が下総東氏後裔は鹿島神宮の宮司へとつづいた。（四）

胤行も名門藤原家と縁を結び（定家の子為家の娘を妻にした）和歌をよくした。勅撰和歌集に多く選ばれた。

四、またまた悲しい宝治合戦（一二四七）

政子の父北条時政　初代執権より五代目の時頼は三浦氏の泰村が反時頼であると感じ、討ってしまった。これから東氏に災難がふりかかってきた。三浦泰村の妹の婿は上総秀胤である。　秀胤の三男、泰秀の妻は東胤行の娘である。

男子は森山城で生まれた。秀胤と胤行は親戚（五）

時頼は三浦氏と関わる者は討てというのである胤行の心さぞかし重かったとうかがえるが忠誠を尽くすため、秀胤の館に行った。そこは大柳の館（現千葉県睦沢町）到着すると館に火を放った一族は皆最後をとげた。時頼は胤行に恩賞を与えようとするが胤行は辞退し、ただ孫の命だけはと願い許された。お産は森山城だったので胤行は早速命じて乳飲み子の孫と乳母、家来たちに北へ向かわせた。東北には東の姓があり、青森にはかなりの名家がある。

五、美濃山田庄へ胤行移り築城

建長元年（一二四九）胤行と三男の行氏は山田庄で阿千葉城を築いた（現郡上市大和町、郡上八幡の北）地元では〝あぜち千葉〟といった。後にこれがつまってあちば＝阿千葉になったということ。この城には行氏の次に時常。氏村になって少し南の篠脇城に移った。胤頼から六代目（六）。

六、建武の中興（一三三三↓二年半）足利政権へ

第九六代後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒し天皇親政を復活させた。時に元弘三年（一三三三）。ところが武家政権を望む武士達がいた。足利尊氏はそのまま鎌倉にとどまり、新田義貞とも確執した。こうして義貞と主導権争い。足利政権合法化に後醍醐天皇（南朝）より北朝の光明天皇へ神器授受を行った。実は偽物。（七）。建武三年（一三三六）室町幕府開始、氏村や千葉氏は新田義貞と北陸官軍の力を盛り上げようとした。同年（一三三六）、途中の木芽峠で大雪の足利側地域へ迷い込んでしまった。約五百人もの軍勢。足利側の熱意あるはからいで足利側についた。自害しようと義貞は考えたが、大軍であったので思いとどまった。

氏村は詩をよくし勅令で次のように歌った。

鳴神の音はそこともなかりけり
くもれる方や夕立の空（鳴神・・・雷の音）

七、千葉氏の内紛～応仁の乱（一四六七年）から十年間、東氏十一代常縁の役目

時代はくだり東常縁は幕命により康正元年（一四五五）東庄に下向。千葉氏の内紛をおさめるためで、東大社に詣で戦勝祈願をした。

静かなる世にまた立ちやかえらなん
神と君とのめぐみ尽きせず

千葉氏一六代胤直の時代で胤直の配下（二派原胤房対円城寺尚住）が勢力あらそいし、千葉氏実権の弱体化。紆余屈折し馬加城主康胤は胤直の叔父で、すきをみて千葉宗家となってしまった（千葉氏一八代）。（馬加は現千葉市幕張）。胤直は自害して果てた。

さて常縁は早速、下総中の兵を集め、馬加城を攻めた。翌年（一四五六年）康胤は上総八幡（現市原市八幡町）で敗死した。しかし康胤側の残留軍追討に明け暮れ。京では足利義政の後継争いとなり義政の子、義尚の側山名宗全と義政の弟、義視の細川勝元が応仁元年（一四六七）に武力衝突。山名側は西軍、細川側は東軍（東氏も東軍）。これが応仁の乱とになった。篠脇城は西軍の斉藤妙椿に落城させられた。時に一四六八年。常縁の兄、氏数が守っていた。妙椿は常縁に和歌を詠んでよこせばと伝えてきた。これに答えて早速送ったのである。十首も詠んだという。いくつか次に

思いやる心の通う道ならで
たよりもしらぬ古郷のそら

我世経むしるべと今も頼むかな

みののお山の松の千とせを

木の葉ちる秋の思ひにあら玉の
はるに忘るるいろを見せなむ

ではこのくらいにして妙椿も感動し

言の葉に君か心はみづくきの
行くすゑとをらば跡はたがはじ

と詠んで常縁に送ってきたのである。篠脇城も無事返ってきた。

義政で足利氏も十代で常縁、妙椿も入れて三人は歌仲間でもあった。これも幸いしたのであろう。

応仁三年（一四六九）には義政の耳にも入る。―京に着いた常縁はまた妙椿の好意に感じて歌を詠み妙椿に送ったことを。

篠脇城近くに明建神社がある（北極星と同一視した妙見信仰の社である。）

社前にには歌碑がある。

花ざかり所も神のみ山かな（常縁）

さくらに匂ふ峯の榊葉（飯尾宗祇）

常縁が*古今和歌集を伝授しその連歌。

常縁は京の歌人や父益之から指導を受けた。*藤原定家の流れ、冷泉派（れいぜい）の古今和歌集も奥秘を極めた。

八、美濃の東氏滅亡へ～政権遠藤氏へ

縁数（一〇代氏数の長男）は東庄、森山城にとどまり下総東氏をつぎ、常縁没後十二代元胤、十三代常慶に至り篠脇城から赤谷山城移った。越前の朝倉軍が篠脇城に攻めてきた。天文九年（一五四〇）で配下遠藤胤頼、同弟盛数ら、よく戦って敵を追い払った。このことがあって南下、十年に赤谷山

城を築いた（現、八幡町。）ところが常慶の一人息子、常堯は出来のよくない人物だった。遠藤胤頼の娘を妻にと申し込むが断られその後、胤頼をあやめてしまった。

そこで常堯側（赤谷城）と遠藤盛数側（八幡城）が争った。永禄二年（一五五九年）に赤谷城が落城。常堯は逃亡し、北方の白川で没し、東氏ついに滅亡。政権は遠藤氏に移った。しかし幸いなことに東氏の血脈は遠藤氏に続いたのである。

九、遠藤氏の行方

兄遠藤胤頼が不幸な末路となり、弟盛数が遠藤氏初代となった。実は東氏十三代常慶の養子で、常慶の娘が妻である。武名高い遠藤氏が、その姓で郡上八幡城に拠した。亡兄胤頼の子胤俊に領地半分を（現大和町）自分（盛数）は郡上八幡を領した。（六）

二代慶隆（母は東常慶の娘）以下東氏の血脈が続く。世は戦乱で斉藤龍興に従い、斉藤、織田信長に降参。慶隆、信長に従った。その後遠藤氏は近江国（現滋賀県野州町に）移り、三上藩主は元禄十一年（一六九八）に野州郡ほかの郡二七ヵ村一万石を与えられた。（八）。

胤城は明治十一年勅許により遠藤氏から東氏に復した。十一代で遠藤の姓は終わった（五）

十、豊臣秀吉　小田原城攻略

東氏の変遷　東庄町へ

豊臣秀吉が天下統一を目指し関東へ進出、天正十八年（一五九〇）に、後北条氏の小田原攻略。関東の大部分は後北条氏の配下で、東氏十七代直胤は千葉連合軍の総大将となり、湯本口で奮戦。千葉氏二十九代の重胤はまだ幼少であった。直胤は討死し、党の血脈は終わったかに思えたが一棟胤がいた。母は東氏十四代常和の妻、父は胤富（後に千葉氏二六代

になった。）棟胤は森山城で誕生（五）。森山城も秀吉に降伏、落城。棟胤四九歳。徳川氏に城を明け渡し美濃に移った。美濃東氏縁数が東庄にとどまり（十頁参照）。今度は棟胤が美濃へ行ったのである（下総東氏十八代）。十九代久胤は美濃から出羽国長井郷（現山形県）へ。以降ここにとどまり二十六代則胤が江戸へ出た。後に匝瑳老尾村（現匝瑳市）へ。二十七代将胤、二十八代忠胤は老尾神社の神官を務めた。二十九代義胤は日露戦争に従軍。長男孝胤が早世し、次男、保胤が三十代となり東庄町宮本に住した。東庄の総鎮守、東氏にゆかりある東大社に近い南に住居がある。三十一代は匝瑳市在住とうかがっている。

追記

(1) 千葉常胤の七男　日胤

日胤は源頼朝の祈願僧で現滋賀県大津市の遠城寺住、源平合戦には源頼政の軍に従い戦死。

(2) 東庄町笹川の諏訪神社の神楽

源頼朝の武運長久を祈り、鎌倉幕府創設の一年前からおこなわれていると伝わる。

(3) 学僧　龍山徳見（一二八四～一三五八）

臨済禅のこの僧は東氏一族の出身。東庄町笹川の東方、鹿野戸の龍神山という地名から龍山をとった。学才に秀で中国で修業もし、足利直義にも敬意され、建仁寺から天龍寺と住持を務めた（九）。

終わりに

以上概略記しましたが主なことは東氏の流れが三系統であることです。

即ち初代東胤頼から三代目の胤行から美濃東氏となりました。胤行の長男の系統が下総東氏、子孫は鹿島神宮の宮司

となりました。小田原合戦で討死した東氏、一七代目直胤（美濃東氏一二代目縁数が森山城にとどまる）。そのため千葉氏より東氏をたてなおし一八代棟胤よりつづき三〇代目、東庄に住んだ保胤氏に至りました。

参考及び引用資料

(一) 千葉県の歴史、小笠原長和・川村優著（山川出版社）(2)森山城主、「東氏」と東大社宮司「飯田氏」飯田武士著（東庄の郷土史第三十号）(3)東氏と和歌、海上義治著（東庄の郷土史第十三号）東氏八百年史、山田勝治郎識(5)千葉大系図編集東庄郷土史研究会・発行東庄町教育委員会(6)東氏ものがたり、編集・発行東氏文化顕彰会(7)国民の歴史9（文英堂(8)東氏、遠藤氏と三上藩見学、野州町立歴史民俗資料館、石毛豊著（東庄の郷土史第十号）(9)県外千葉氏一族の動向（千葉市立郷土博物館）

美濃東氏後裔、東たか子さん来訪

たか子さんは平成二七年五月二四日鈴木佐さんの案内マイカーに同乗、東庄町公民館で千葉氏、東氏の関係展示物を見学された。次に東胤頼夫妻の墓所に参詣された。そこは森山城跡の南麓須賀山城址近く。私達郷土史研究会会員土屋清實、林俊之、平野剛、土屋博各氏四人もお供した たか子さんは時にはご自分の姓を遠藤ともいわれるとのこと。明るいお人柄、私達四人はここでお二人をお見送りした。